

# 代官岡上景能の笠懸野開発をめぐる

—正しい地域史を知ること—

西 沢 淳 男

## A Discussion over the Development of Kasakakeno by the Local Governor, Kageyoshi Okanobori

— Correct Understanding of Regional Histories —

Atsuo NISHIZAWA

### Summary

The story of a local governor of the Edo Shogunate rewarded as a local great figure, often differs from the historical fact and the portrait unnecessarily perceived as a hero penetrates the region. His story has an influence on the local sightseeing information and/or the supplementary readers distributed by the school board and the myth is being confused with the historical fact and educated at places of regional history learning. Based on such present situation, this paper examined the historical fact of Kageyoshi Okanobori who developed Kasakakeno as a case study in Gunma Prefecture. Misinterpretation of facts was due to the description based on the imperscriptible secondary materials, "Biography of Sekko Okanobori" and "Biographical Sketch of Kageyoshi Okanobori" as the reference. In addition, "development of new field", a term representing development was misused as creation of new paddy field and people of that time concluded the open-cut water supply was for creation of a paddy field. The paper showed that the Okanobori water supply developed at end of the Edo Shogunate and during the Meiji Period was associated with increased paddy fields, which created an illusion that it was the very water supply developed by Kageyoshi Okanobori.

Keywords : regional history, local governor, Kageyoshi Okanobori, Okanobori water-supply,  
development of new field

# 代官岡上景能の笠懸野開発をめぐる

——正しい地域史を知るということ——

西 沢 淳 男

## 要 旨

本稿では、全国各地で郷土の偉人として顕彰されている江戸幕府代官が、史実とは異なり、いたずらに英雄視されて地域に浸透し、観光案内や教育委員会配布の副読本・掲示板にまで影響し、学校の地域史学習においても俗説が史実と混同され教育されている現状から、群馬県内の事例として笠懸野を開発した岡上景能についての史実を検証した。事実誤認の理由の一つとしては、典拠の示されない二次史料である『岡登雪江伝』『岡登景能伝略』を参考として記述されていることであった。また、「新田開発」という開拓を指す用語を、新しく田を切り開くことと誤用したため、開削した用水は水田化のためと結論づけなくてはならず、幕末・明治期以降開削された岡登用水による田地の増加と結びつき、岡上景能の開削した用水と同一のものであるかのような錯覚を招いてしまったことを指摘した。

キーワード…地域史、代官、岡上景能、岡登用水、新田開発

## はじめに

地域史は歴史学の一分野であり、ある地域を多角的に考察し、民衆史や生活史のなから、地域独自の歴史を発掘し叙述し、これから取り組んでいかなければならない地域の課題を解明していく学問である。

近年学校教育の中で、地域学習の場に地域史を取り入れていくことも珍しくはない。しかし、学習内容が史実と異なっていた場合、児童・生徒あるいは地域社会に与える影響は少なくないのである。戦前においては、郷土人が郷土の歴史を叙述し、それによって愛郷心を養成すべきものという観念がしだいに一般普遍化した郷土史が隆盛した。郷土史には、いわゆる「好古趣味」から発展して、郷土偏愛の立場からその価値や特性を過大に誇示し、ついには「お国自慢」におちいってしまうということがある、昭和初年から顕著となった愛郷心の養成と、それを拡大して愛国人を培うという歴史教育の役割を果たすことになった。名だたる中央人、とくに貴種権門と郷土とのつながりを誇ろうとする態度は、往々にして伝説をそのまま歴史と認めようとして附会の誤りをしばしば冒してきたのであった。<sup>1)</sup>しかし、戦後になり郷土史研究の反省から誕生した地域史(地方史)研究の進展により、史料にもとづいた史実が明らかにされるようになった。ところが、地域にとって著名な人物や事績に関しては未だに戦前の郷土史的なものが

残っている場合があり、それが改められずに、観光案内や学校教育等にも史実として取り入れられていることも多いのである。

例えば、熊本県天草地域は島原・天草一揆の舞台としても知られているが、その後幕領となった当地を復興した代官として鈴木重成がいる。平成十五年鈴木重成公歿三五〇年を記念した鈴木三六銅像建立運動が起こるまでは、天草地域全域に鈴木神社を中心に「鈴木さま」と称え心の支えとした祠・小社が三千箇所以上存在し、「苛酷な重税にあえぐ民衆の窮状を打破するため、一命を賭して幕府に直訴し、石高半減の減税を実現せしめた天草四郎と並ぶ救世主」として神格化され、学校教育・観光そして地域へ受容されてきた。

ところが、銅像建立の公費支出等に関わる問題が生じて地域史の学習会が開かれ、神格化の根拠となる事実が史実と異なることが明らかにされてきた。結局銅像は当初の予定地とは異なり、平成十九年になり天草信用金庫本店前庭に完成除幕されることとなった。この問題以降、一旦地域に根ざし流布した情報(俗説)がすべて書き改められるには至ってはいないが、少しずつ変わりつつある。

こうした変化は地域史研究の賜物であり、とりわけ地道な研究を続けた鶴田文史が一次史料である金石文や一次・二次史料(古文書)から、死は「自刃」ないし「切腹」ではなく病死であること、「年貢半減」ではなく「石高半減」であり、村高が減らされていても免が上がつているので取高は同じか、むしろ増していること等を明らかにしたことが大きいのである。

近年一般が最も利用するインターネット上のオンライン百科事典ウィキペディアにおいても編集履歴を見ると、二〇〇六年に新規に項目が作成された時点では、「年貢減免を訴えて自刃」との記述がなされていたが、二〇一〇年に編集され自刃説は史料がない点と病死である点が追記されている<sup>③</sup>。

以上は、観光地である天草地域での極端な事例であるが、類似のことは全国他地域でも散見されるのである。

そこで、本稿では群馬県内における類似の事例として、代官岡上景能の笠懸野開発が一般にどのように認識されているのか、また史実と齟齬はないのかを検証していきたい。

## 一、地域における岡上景能と笠懸野開発の認識

これまで岡上景能や笠懸野の開発について『笠懸村誌』<sup>④</sup>、『敷塚本町誌』<sup>⑤</sup>等の自治体史を除けば、主要な研究・解説として『代官岡上景能』<sup>⑥</sup>、『岡登用水史』<sup>⑦</sup>、『考証岡上景能』<sup>⑧</sup>、『岡上景能とあかがね街道』<sup>⑨</sup>、『岡登用水』<sup>⑩</sup>（企画展図録）<sup>⑪</sup>、『笠懸野を開発した足尾銅山代官岡上景能』<sup>⑫</sup>、『代官岡上景能と足尾銅山街道』<sup>⑬</sup>、『笠懸野の開発と岡登用水開削』<sup>⑭</sup>、『長池寺溜池と岡上景能』<sup>⑮</sup>等がある。

しかし、一般に観光あるいは学校教育の現場において史実を知ろうと目にするものは、研究書や研究論文ではなく、現地の観光案内、説明板、学校副読本やメディアコンテンツ等である。WEB上でも検索

にヒットするが膨大であり、管見の限りではこれから紹介する史料の二次利用がほとんどであるので、取り上げなかった。  
ではここで、そのいくつかをみていきたい。

### 史料1<sup>①</sup> 岡登霊神社案内板由緒

代官岡登次郎兵衛景能公は武州高柳村（埼玉県児玉町）に生まれた。承応三年（一六五四）幕府代官に任用され父景親に従い吾妻郡東村岡崎新田開発に榛名湖を源とする沼尾川より引水し多くの水田を拓いた。

大間々扇状地帯にある笠懸野は古渡良瀬川の河床であったため、いわゆる不毛の地であった。景能公は寛文九年（一六六九）笠懸野に赴任し鹿之川に陣屋を設けて管内を綿密に調査測量の上農民のために開発の許可を得た。

そして足尾町を起点とする銅山街道沿いに地区割を設け、久々字桃頭本町大久保山之神六千石権右衛門溜池と不毛の土地二〇五二町歩を開発し原八ヶ村を新設した。更にこの地に水を引くべく大間々地内の渡良瀬川右岸（蕪町）より岩盤を削り抜いて取水口を設置し三俣分水により用水を西南に二分するなど難工事を重ね念願の笠懸野を潤す岡登用水を完成させたのである。開拓住民の安住は先づ敬神崇祖の精神をと大原神明宮をはじめ五社三寺を創建して民心の安定に心を盡くした。偉大な事蹟を重ねられた公は貞享四年十二月三日（一六八七）冤罪を被り自刃され

た齡五十余才と伝えられている。遺骸は笠懸町国瑞寺に葬られその功績を認められ大正四年従五位を贈られた。

地区村民は公の恩に報いるため、宝暦二年（一七五二）京都吉田神道家に神号下付の運動を行い「顕信靈神」の神号が下付され、ただちに本町村神明宮境内に社祠を建立「岡登靈社」とした。

時代は還り用水路再興の願いは明治五年許可され翌年完成した。

その後昭和三十一年から岡登用水の笠懸町阿左美沼東貯水池に於て開催されている競艇の事業収益は周辺市町の財政を潤している。

景能公没後三百年、今尚公の恩恵に浴しているのである。

## 史料<sup>(15)</sup> 銅像（岡上次郎兵衛景能公業績略記）

寛文八年足尾銅山奉行に赴任、併せて寛文十年頃この地方の代官となり任地大間々扇状地帯の荒地を開発、渡良瀬川より用水を引いた偉大なる郷土の恩人である。

公は鹿ノ川に陣屋を設け、久宮村、桃頭村外郡内に計八ヶ村を新設し、既存の村々にも増及、合計二〇五二町歩余を開発した。一方、大間々地内渡良瀬川右岸の岩盤を切り取り取水口とし、川底より高台の土地に送水する難工事を成し遂げ、二大事業を完成させた。

しかし、渡良瀬川下流の侍（まち）・矢場両堰が水利権の既得

を主張、僅少の水の外は「冬水のみ」と、厳しい「水取證文」を

渡された。公は冬水を貯めるべく岩ノ下溜井（現鹿ノ川沼）を築いた。水は更に領民の生活用水として銅山街道沿いに流し、郡南部（現綿内地区）に溜池を作り貯水した。しかし、この事業を理由に湧水問題で讒訴にあい、江戸に召喚される途次、駕籠の中で自刃したと伝えられる。時貞享四年十二月三日であった。

公は土木技術を父代官景親と帰化僧独堪和尚（国瑞寺開山）に学び、灌漑・治水工事に優れた手腕の代官であった。

明治十七年九月二十九日、生前の功が認められ、名誉回復が計られると共に、朝旨を得て金五拾円が明治政府より下賜された。

大正四年十一月十日、従五位を贈られた。

## 史料<sup>(16)</sup> 史跡岡登次郎兵衛景能公墓の解説板

景能公は埼玉県児玉郡高柳村に生まれ、父景親の後を受け、寛文二年將軍家綱の時幕命により笠懸野に陣屋を築き代官として移住した。生来剛直、淡泊で国のため、人のためになることならば世論に関せずただ実行に命をかけても遂行する立派な開拓人であった。

当時笠懸野は原野で、水利が悪く耕作皆無の状態で荒れ果てた土地であった。景能公は、この土地に水をかंगいするために渡良瀬川より水を引き、寛文十二年十年以上の年月をついやして岡登用水を完成させた。

用水堀の長さは二十四kmに達し、笠懸町、藪塚本町、新田町、赤堀町、東村の七町村にわたり、荒野に農耕が可能となり、現在の笠懸町に発展した。しかしこの大事業も、心なき人々の悪口、同僚官吏による嫉妬、下流住民の余水のわき出し等苦言により、幕府に召喚され貞享四年十二月三日切腹を申しつけられ、自害した。当時五十余歳といわれている。その後、生前の功勞により大正四年十一月十日追賞を受け、従五位を贈られた。

#### 史料 4①

前橋市から少し東に笠懸町というところがあります。この田んぼにカエルの親子が住んでいました。

（母カエル）「ねえ、お前達、私たちの住んでる、この田んぼの水がどこから来てるか知っているかい？」

（兄カエル）「知ってるよ、渡良瀬川から水を引いた岡登用水の水だよ」

（中略）

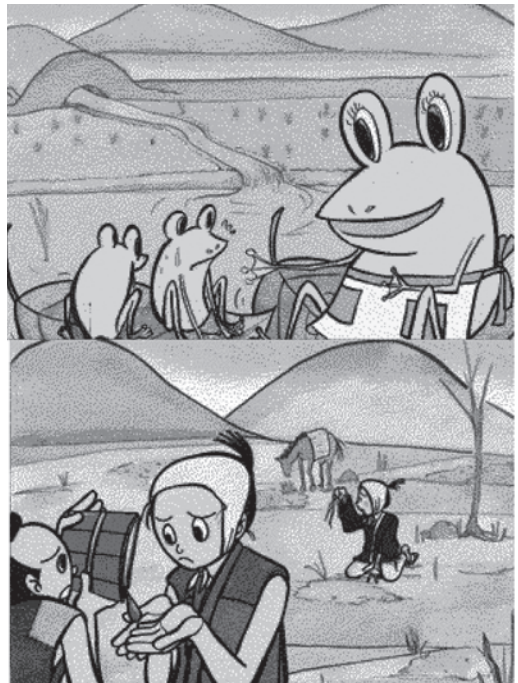
むかしむかし、今から300年以上も昔。

赤城山の南東には荒れ地が広がっていました。

今では豊かな田んぼが広がっているこの場所は、昔は水が無い  
ため、米や野菜をつくることができませんでした。

ここに、岡上景能という農民思いの代官がいました。

ある時、この地を見回っていた景能は言いました。



「この土地は水が無いのでいつまでもたっても荒れ地のままだ。こまめではせいぜい馬を放し飼いにするくらいしかできない。水があれば、田んぼや畑ができて、ここに住む農民の暮らしも豊かになるのだが…」

（中略）

さつそく、景能は荒れ地を開発するための図面を作り、大間々の渡良瀬川へ向かいました。

（中略）

こうして、いよいよ水を引く工事が始まりました。

（中略）

「やった!! トンネルが完成した!」



「おおいー！ 水が来たぞ！」

「ちゃんと水路を流れていく！」

「ばんざーい！ これで米が作れるぞ！」

（母カエル）「こうして、工事は9年かがりで完成し、それまでの荒地地は水が来て田んぼがつくれ、他の村でも次々と新しい田んぼがつくられたのよ。おかげで今では、立派な田んぼや畑が広がっているの。」

（弟カエル）「じゃあ、今の僕たちがここに住めるのも、おいしいスイカが食べられるのも景能さま達のおかげなの？」

（母カエル）「そうよ。でも、これは岡上用水だけのお話じゃないの。水に不自由した昔の人は、苦勞して沢山の所に用水路を作ったの。」

（後略）

## 史料<sup>(18)</sup> 5

- ・「荒れはてた笠懸野にもいまでは200ヘクタール余の水田が広がっているよ。それは代官岡上次郎兵衛景能公が渡良瀬川から用水路を引いたり荒地を開拓したおかげだよ」
- ・「水を引けば土地も水田にかわる」
- ・「用水をつくるための幕府からたまわった大金」
- ・「いよいよ新田開発だ」「緑したたる水田になるのだ」
- ・「溜池の底がもれた事件で訴えられ」「罪状溜池の漏水により他

領の農民を苦しめた」

史料1～3の三ヶ所の案内板は、おおよそ岡登景能が不毛の荒地地に渡良瀬川から引水し、岡登用水を完成させ、二〇四五町歩（約二〇四五ヘクタール）を開発したこと、冤罪により最後は自刃したと、等が共通している。（傍点筆者）

史料4は、紙芝居『岡登用水ものがたり』である。史料の性格上、絵の一部と主要なセリフ部分を引用したものであり、史料5は笠懸町時代に町長が発刊の辞を記、現在でも岩宿遺跡博物館で販売されている『まんが岡上景能公』である。これも史料の性格上、マンガの吹き出しの主要な部分を抜粋したものである。この史料4・5は、代官岡上景能が不毛の笠懸野に用水を引くことにより、水田地帯に生まれ変わり、現在もこの地を豊かに潤していることが描かれている。

この他に、駐車場に岡上景能銅像の建つ岩宿博物館で配布されているパンフレット「郷土の開拓偉人、岡上景能」がある。<sup>(19)</sup>説明は史料1～6の趣旨と同じであり、鹿の川陣屋種定復元図が掲載されているが、陣屋及び周辺が水田を連想させる緑で満ちている。

また、群馬県総合教育センターのG-TAK.NET\_BB（マルチメディアコンテンツ）に群馬県教育委員会作成の小学校三・四年生社会科コンテンツ「岡登用水」「岡登用水2」、中学校社会科コンテンツ「岡登用水」がある。<sup>(20)</sup>

何れも三～四分程度の短いものである。映像及び内容はほぼ共通し

ており、映像の随所に水田が強調され、寛文四年に工事が始まり、代官岡登景能が用水を引いたことにより荒野が水田に生まれ変わり、用水名として残ったこと、実績を妬まれ幕府に訴えられ、江戸への召還途中に切腹したことが描かれている。

## 二、一次史料と二次史料

史料には、その時代に書き残された一次史料と、一次史料等を加工・編纂した二次史料がある。

地域史を描く場合、出来る限り良質（客観的）な一次史料に当たることが望ましい。しかし、一次史料のみでは難しい場合も少なくない。その場合、二次史料を利用することになるが、十分な精査が必要となる。

第1表は、笠懸野の開発と用水に関する主要な史料を時系列に並べ、各々の史料に一次史料と二次史料の別を付したものである。表に示した史料により史実をみていくと、寛文九年に代官見立て新田（笠懸野）の申請があり、妻木頼熊と伊奈忠臣の二名が新田場の巡察に来た。巡察の時は裁許絵図で見る限り足尾銅山街道が新道として開通しているのみで、笠懸野は未開発である。巡察使の帰着後、この申請は許可されたようで、一年三ヶ月後に描かれた開発絵図面から、大原宿が整備（街道沿いに家並みが描かれている）され、新田村の開発が進んでいることが確認できる。史料14によれば、新田（久宮・桃頭・六千石・

大原本町・山之神・大久保・権右衛門・溜池）は、入植者が請負衆へ対し地代金・年貢関係の事等々を誓約・提出し新田村を形成した。

一方、新田開発と併行して用水の開削も進められた。史料11は、研究史においても採り上げられてこなかったもので、全文を示す。

## 史料 11

二月二日埒明候、岡上次郎兵衛持参之書付

覚

一、水之分石を立、水之減御見分之所ハ館林領之関口か舟着之河岸か両所ニ相定申度奉存候、最前差上ケ申候書付も其通ニ御座候

一、水引申月之定ハ十月より三月まで関口あけ、四月朔日より関口塞、夏満水之時分ハ関口水門よりこし水之分ハ引取候様ニ仕度奉存候

一、関口之中六尺、深サ川水へり不申程取可申候、其上川水旱ニ而も水関入不申候得者、増水御座候可申様無御座候、川水之増減次第関水も其通ニ御座候、就夫水門何尺あけ二と相定申候上ハ、以来まで水取候分量相極り申候、以上

子正月晦日

岡上次郎兵衛

高室介右衛門

これまでは史料13の証文を以て幕府評定所から一方的に裁定された



表 1 笠懸野開発及び用水開削主要史料

史料番号	史料別	年 月 日	事 項	出 典	註
史料 6	二次	寛文 9年 6月14日 (1669)	上州笠懸野他巡察の命	「嚴有院殿御実紀」 卷38	21
史料 7	二次	同年 6月14日	新田となすべき地を検す	『寛政重修諸家譜』	22
史料 8	一次	同年 6月25日	村境論争裁許絵図	田村和万氏蔵	23
史料 9	二次	同年11月25日	新墾の地巡察終て帰り	「嚴有院殿御実紀」 卷38	24
史料10	一次	寛文11年2月	笠懸野新田開発計画絵図	片山英弥氏蔵	25
史料11	二次	寛文12年正月晦日	覚(二月二日埒明候、岡上次郎 兵衛持参之書付)	『竹橋余筆』卷5	26
史料12	二次	寛文12年2月29日	笠懸野論所を検す	『寛政重修諸家譜』	27
史料13	一次	寛文12年4月5日	覚(取水の儀に付)写	柳伴助氏蔵	28
史料14	一次	寛文12年5月1日	笠懸野御新田請負手形	瀬戸勇氏蔵	29
史料15	二次	貞享 4年 7月6日 (1687) 12月3日	岡上景能遠島・切腹	「常憲院殿御実紀」 卷16	30
史料16	一次	元禄 2年4月 (1689)	覚(岡上次郎兵衛引負金弁納之 儀に付)(写)	津久井栄太郎氏蔵	31
史料17	一次	同10年7月	笠懸野新田絵図(写)	片山英弥氏蔵	32
史料18	一次	同10年11月	鹿田新田年貢割付状	岩崎全男氏蔵	33
享保11(1726)年『岡登雪江伝』(二次)著す					
史料19	二次	享保17年11月 (1732)	本町宿絵図(寛政2年3月写)	滝原経男氏蔵	34
史料20	一次	宝暦7年12月 (1757)	乍恐返答書を以奉申上候(古堀 通り竹木払い訴訟二付)	清水清弘氏蔵	35
史料21	一次	安政3年11月 (1856)	入置申一札之事(用水再興願に付 )	国文学研究資料館	36
史料22	一次	明治5年8月22日 (1872)	用水再興願い	国文学研究資料館	37
明治17(1884)年『岡登景能伝略』(二次)著す					

と解釈されてきた。しかし、この史料では、史料12にある翌月末の論所役人の見分箇所を館林領の堰(取水口)や船着之河岸(高津戸渡力)を指定し申し出ている。しかもこの覚の前にもこの趣旨を含む書付があり、提出していたことを窺わせる。

水引に関しても、四月に井堰を閉じるが、夏場については井堰水門を越えた分のみ利用したい。

井堰の中については六尺、深さは水が減らない程度にする、洪水や干魃等によって川水の増減があった場合は、用水もその様にするが、水門何尺開けると定めたならば、以後の取水量も決まる。という三点を申し立てている。

申し立ては二日後に決まったようで、史料12にある中山勝之と御手洗昌義が派遣され見分し、その結果として、史料13にある証文が出された。岡上景能らの主張より一月長い九月からの取水とし、水門に関しては具体的に高三尺の戸を立てることと定めたのである。用水開削は、景能単独のものではなく、代官高室政職との立会支配であった。延宝五年六九歳で政職勇退まで続いている。<sup>⑧</sup>そして、貞享四年に負金等により処断され切腹となった。これについては次章で詳細に検証する。

その後の笠懸野御用水は、元禄十年の新田絵図面にも確認でき、宿用水として機能していたことがわかるが、宝暦七年段階では「古堀浚」と記されているところから、利用継続の有無は判然としないが、街道沿いに用水掘は確に残っていることは確認できる。また、開削した

用水が灌漑用水ではなく宿用水としてのものであり、新田開発が水田化を目指していなかったことは、一例として元禄十年の鹿田新田割付

状をみると田方はなく、畑方のみで新畑・林畑・芝畑・屋敷・風除林とあることや、原本が享保十七年とされる本町宿の絵図面に、街道に面した屋敷の奥が、順に風除・新畑・林（畑）・芝（畑）・林と描かれているところからも明らかで、林畑や芝畑といった名目として等級の付かないような石盛も低い極めて地味が悪い土地である。したがって、寛文十一年の開発絵図では凡そ二千町歩を計画しており、水田であれば二万石にはなるが、実際は六千石程度にとどまっているのである。

その後、安政三年以降用水再興運動が活発化し、岡上時代の古堀を再興した三叉分水までと、それ以降の新規開削の用水が原形となり、取水口の変更等があるが「岡登用水」として現在へ続いていくのである。史料にもとづく史実は、一章で説明されたことと随分と異なっている。

では前章の説明は何を典拠としているのだろうか。それは二次史料である『岡登雪江伝』<sup>39)</sup>と『岡登景能伝略』<sup>40)</sup>であると思われる。

『岡登雪江伝』は、岡上景能のもとめで開基された黄檗宗国瑞寺の第三世桃巖の著による景能の伝記で、死後三十九年を経た享保十一年（一七二六）に漢文体で書かれたものである。内容のポイントとなる部分の大意としては、「不毛の地である笠懸野を灌漑すれば上にも下にも利があるとして、村民数百人を動員して二万石の新田開発をするが、負金があり、下僚の帳簿管理も十分ではなく、権力者の恨みによ

り死刑の罪になり、切腹した。支配所では老若男女を問わず皆泣いた」とある。

『岡登景能伝略』は、明治十五年（一八八二）八月に群馬県令楢取素彦から追實の上申書として出されたものと同内容で、同十七年楢取の命により県の官吏であった山崎衡がまとめたものである。同年秋には地元主催の追實祭典が盛大に挙行されている。内容のポイントとなる部分の大意としては、「寛文四年渡良瀬川から用水を引き、鹿川に陣屋を置き、笠懸ノ原八ヶ村をはじめ周辺も含め、五千七百石余の新田開発をしたが、水患として上流では水涸れ、下流では水漏れにより苦情が出され、そのため事情聴取に江戸へ召還されるが、負金もあり裁かれることを甘受せずに、途中の駕籠の中で自決した」とある。なお、明治二十年に建設された岡登霊神社境内の『岡登景能紀功碑文』<sup>41)</sup>は、略伝をやや簡略化したもので、上申書とともに三者の内容はほぼ一致している。

何れも記述の根拠となる典拠が示されておらず、二次史料としては相当の注意が必要となるものである。一方で、同じ二次史料ではあるが、寛政十（一七九八）年を下限とした大名旗本各家の系譜を編纂した『寛政重修諸家譜』（文化九年（一八〇六）完成）、寛永期迄の系譜を編纂した『寛永諸家系図伝』（寛永二十（一六四三）年献上）、慶安四（一六五二）年までの旗本の伝記史料集である『干城録』（天保六（一八三五）年献上）、御家断絶となった大名・旗本家の系譜である『断家譜』（文化六年編纂）、徳川家の編年史である『徳川実紀』（天保

十四年献上」等は幕府編纂のもので信用度は高い。実際、記述内容が史実や傍証史料と符合するものが多い。

### 三、誤認識

地域史を描くには、前章でみてきたように基本的には良質な一次史料を用いるべきである。この点、前掲『考証岡上景能』ではいたずらに景能を賛美誇張することに警鐘し、新たな史料を発掘し実像を明らかにしようとしたが、多分に推理・想像が入り、史料解釈にも誤りがみられた。

そこで、一章でみた史料の何が誤認識なのか、何に齟齬があるのか大きな点を四つに絞りみていくこととする。

#### (一) 新田開発

まず、「新田開発」という言葉である。新田開発とは、一般には文字通りで「新しい田んぼを開発すること」思われている。実際に筆者が法政大学の史学科の学生で、専門科目である「日本近世史」受講生約一五〇名に尋ねたところ、ほぼ十割近い学生が同様の認識であった。また、本学における平成三年度教員免許更新講習（地理・歴史）の際に受講していた小・中・高等学校の教諭四〇名ほどにも尋ねたが、数人を除いて同様であった。前に示した研究史においても同様である。研究者や歴史学専攻の学生、あるいは学校教諭であっても「新田開発」

というあまりにも安易な用語は調べずに解釈しているのであろう。しかし、ここに盲点がある。新田開発を『国史大辞典』<sup>(43)</sup>で引いてみると「近世における新耕地（田畑とも）造成事業の総称」とある。すなわち開拓事業を指す言葉であり、たとえ開発された土地が畑のみであっても新田開発というのである。

ところが「新田」という言葉の先入観に左右され、映像や絵に田園が広がり、用水は水田のためという構図が先にできあがり、客観的な史料にもとづかない誤った地域史の解釈が生まれてきたものと思われる。確かに、明治時代以降に引かれた岡登用水の一部地域には水田が開けているものの、岡上景能の開発した笠懸野の中心部は現在でも畑地とビニールハウスが広がって、まさに水持ちが悪いためにスイカの産地ともなっているのである。

#### (二) 岡上と岡登

二つ目として、苗字が「岡上」なのか「岡登」なのかということである。この混合がまた誤認識を生んでいる。一次史料では基本的に「岡上」で記されているが、二次史料では「岡登」もみられる。景能の通称である「次郎兵衛」も「二郎兵衛」「治郎兵衛」とも記される。近世では、誤字・当て字は頻繁にみられ、「岡登」性を称したことに關しても諸説あるが、とりわけ大きな問題ではない。しかし、この苗字が混乱を招いた。

近世において岡上景能が開削した用水は「笠懸野御用水」と称され

ていた。その後二章でもみたように幕末期から明治初年にかけて再興・拡張されるが、丑木によれば、天保十一年（一八四〇）の藪塚村の再興運動のときには「岡登古堀筋」と岡登が使用されているが、安政三年（一八五六）再興願書には「笠懸野古用水」など様々な呼称が使用され、明治六年以降の願書等の呼称の中に岡登の文字が確実に出てくるようである。岡登堰についても、明治八年（一八七五）ころから「岡登用水堀」などというようになり、十五年以後は「岡登堰」と称するようになり、組合の名称も「岡登用水組合」が使われ、同三十三年に水利組合の名称を「岡登堰普通水利組合」として、以後は岡登堰が正式名称になったという。何れも「岡登」を冠している。このことが、あたかも岡上景能が引いた用水が現代の「岡登用水」であるかの混用を招いているのである。

### （三）景能の処断

三つ目としては、岡上景能の処分についてである。前出の史料1では「冤罪を被り自刃」、史料2では「湧水問題で讒訴にあい、江戸に召喚される途次、駕籠の中で自刃」、史料3では「心なき人々の悪口、同僚官吏による嫉妬、下流住民の余水のわき出し等苦言により、幕府に召喚され貞享四年十二月三日切腹を申しつけられ、自害」、史料5「溜池の底がもれた事件で訴えられ」「罪状、溜池の漏水により他領の農民を苦しめた」とある。

一方、幕府編纂による二次史料三点には次のようにある。

#### ○『寛政重修諸家譜』<sup>(45)</sup>

貞享四年七月六日さきに農民等村境を争論せしことにより、糾明あるところいはれなきことのみ申陳じ、すべて其御代官所の諸事を沙汰するにいたりても、明白ならざることおほく、前条の事糾明せらるゝにをよびても、証なき事まつしつりの私の非をのがれむがため上を掠むるがごとき、所為かさねがさね其罪かろからず、死罪にも処せらるべしといへどもこれを宥められ、八丈島にながさるゝのむね厳命あり、十二月三日すでに其罪を決せらるゝといへども数多の負金あるのみならず、手代の輩にいたるまで指揮よろしからず。すべておほやけをかすめしはからひ、其罪尤重しとて切腹せしめらる。このとき手代のともがら次郎兵衛がことに坐して罪かうぶるもの凡二十余人にをよぶ。

#### ○『断家譜』<sup>(46)</sup>

貞享四年丁卯柳沢出羽守御加増地引渡御用不調法故七月六日八丈島江遠流、同年十二月七日切腹

#### ○『徳川実紀』貞享四年七月六日の条<sup>(47)</sup>

又代官岡上次郎兵衛某は八丈島に遠流せられ（中略）これは上総国山辺郡萱野村。砂田村境界を論争するにより。（中略）次郎兵衛某は。さきに其地を柳澤出羽守保明が采邑に賜りし時。引渡のさま

よろしからざりしに由てなり。

○『徳川実紀』貞享四年十二月三日の条<sup>(48)</sup>

代官岡上次郎兵衛某さきにひが事ありて。遠流に処せられしかど。贓罪多きにより切腹せしめらる。

各々の史料を補完してまとめると、貞享四年七月六日、八丈島へ遠島と決した。処断理由は萱野村と砂田村地境論争があり、その糾明をした折り、この村が前に柳沢吉保領となり景能から引渡される際に不手際や証言に不明瞭なことがあったことが判明、証拠のない申し立ては幕府を欺くことにもなるということで、本来死罪のところ、遠島に減免された。実際、七月付の「岡上次郎兵衛遠島二付浦々御証文」<sup>(49)</sup>が作成されているところからも、遠島が確定していた。ところが十二月三日、判決確定後に数多の負金・贓罪が発覚したことにより切腹となった。これが幕府編纂二次史料から客観的にみた史実である。真相は別にあるとの見方がされるが、管見の限り、その他の理由による処断も、また在方からの湧水等の訴願史料は発見されていない。

一方、史料1～6では景能のみが敵視され、犠牲となったかのような表現（景能を偉人化するためか）もみられるが、この処断はミクロではなくマクロからみる必要がある。幕政からこの一件をみると、天和・貞享から元禄期（一六八一～一七〇四）は、傍系から宗家を継承した五代將軍綱吉による「天和の治」と称される賞罰厳明策がとられ、

大量の幕臣・大名が処断された時期に当たる。<sup>(50)</sup>幕領については、総代官の未進会計調査をし、監察強化を図っている。景能の処断直前の貞享四年六月二十一日にも勘定組頭に総代官の会計を査検させている。<sup>(51)</sup>將軍綱吉期二九年間に処断された代官は五一名で、ほとんどが景能と同様の幕初以来の世襲代官で、この内半数は「年貢負金」「贓罪・年貢滞納」という理由、つまり景能の間われた罪状と同一である。<sup>(52)</sup>

景能自身、前にみた史料16に「岡上次郎兵衛引負金之内拙者御請仕候并納金三百五拾両」とあるところからみて、処断理由の負金が相当数あったと思われる。幕政史からみれば、取り分けて景能に照準を合わせたのではなく、会計監査を厳格にし、傍系である將軍綱吉の神輿を担ぐ家臣団を構成・改革実行するためのリシャッフル<sup>(53)</sup>「天和の治」で処断された代官達の一人に過ぎないのである。

また、景能の最後についての表現である。『日本国語大辞典』によれば、自刃は「刀剣を用いて自分の生命を絶つこと」、自害は「近世では、男の切腹に対して女がのどを刺して自殺するのいう」、死罪は「江戸時代、御定書に規定された生命刑六種の一つ。斬首刑で、その死骸を試斬にされるもの」、切腹は「江戸時代、武士に科した刑罰の一つ。死刑のうちで、もつとも軽いもの。検死役の前で、みずから腹を切るところを介錯人が後ろから首を打ち落とした」とある。幕府の判決は、当初死罪になるところ遠島となり、その後改めて切腹である。切腹は、死罪や遠島と同様に刑罰の一つであって、単に腹を切ること、すなわち自殺ではないのである。



#### (四) 景能の所在

四つ目として、岡上景能の所在である。この点の指摘のない史料<sup>4</sup>を除いて、メディアコンテンツも含め、景能は笠懸野の代官として鹿川陣屋に在陣（陣屋に在駐すること）しており、ここより江戸に召還されたような表現で描かれている。景能の支配所を代官名の記された郷帳で確認してみると、寛文八年（一六六八）次に上野国内での支配所は一万九七八九石余で、新田郡内にはない。およそ二十年前ではあるが慶安二年（一六四九）の武蔵国郷帳では六七二三石余、正保四年（一六四七）信濃国郷帳では一万一六八石余が確認できる。岡上氏は関東十八代官と称される八王子に集住した代官衆の一人であり、広域代官として信濃国や越後国、武蔵国等に名前がみられる。記載内容に明らかな誤りもある二次史料であり、民間の書肆により刊行された『武鑑』で参考までにみても、寛文十三〜貞享四年迄（処断は貞享二年）を編年で確認できるが、上州代官の項にはなく、すべて武州代官の項に記載される。貞享二年からは越後代官の項にも記載されるが、これは、延宝九年（一六八一）松平光長改易後の越後国高田城付地を預かったためのものである。

以上の断片的な史料から考えると、本拠は八王子の代官屋敷で、少なくとも寛文八年以降支配所に組み入れられた上野国新田郡内の鹿川に出張陣屋（支庁）を設けたものと思われる。つまり、景能の所在は鹿川に在陣したのではなく八王子の代官屋敷であり、幕府への召還も

ここからなされたものと思われる。

#### (五) 学校教育における誤認識

以上、四つの誤認識と思われる点を指摘してきた。これまでの俗説を正しい地域史に改めていかなくは、戦前の郷土教育の二の舞にならない。次世代を担う子供達に間違った地域史像を根付かせてはならない。当該地域出身のある女子学生は、「岡上景能は神様扱いをされて教わりました」と述べていた。実際、次のように太田市のある小学校での教育実践例指導案（1 単元名、郷土に伝わる願い 小単元、水田に水を）がある。<sup>57</sup>

「Ⅱ 考察 2 教材観 本単元は、学習指導要領の第3学年及び第4学年の内容（5）のウ『地域の発展に尽くした先人の具体的事例』を受けて設定したものである。ここでは、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考える手掛かりとして、『岡登用水』を開いた岡上景能を具体的事例として取り上げた。岡上景能は、江戸時代に代官として、荒地であった笠懸野一帯（笠懸町から太田市西部）を、農地として活用できる土地にし、地域の人々の暮らしを豊かなものにするようと考え、多くの苦勞や障害を乗り越えて、用水路開発を行った人物である。現在、太田市内に存在する多くの用水は、広大な水田地帯に水を供給したり、工業用水などとして使用されていたりと、幅広く活用されている。しかし、市内の用水は河川と混同してとらえられていることが多い。一方、用水を開墾した岡上景能については現在ほ



ほとんど知られていない。そのため、新たな発見や驚きを伴いながら地域を見直し、地域の発展に貢献した人物の業績を理解させる上で、岡登用水と岡上景能は適した事例であると考えられる。(後略)。

この教材観にもとづき実践授業をおこない、その研究結果報告書では、授業後の児童の感想として『岡登さんが用水をつくったおかげで、今でも用水のあるところはこめがとれている』、『岡上景能のおかげで用水も造られ、生活が楽になった』、『今の私たちの生活にも用水は役立っている』とあり、この捉え方を評価している。

この教諭の授業の前提となっている歴史観は、岡上景能の引いた笠懸野御用水と岡登用水は同一である。用水が引かれ、新田開発によって水田が開け地域が豊かになった。これらの事績により岡上景能は地域の恩人である。と考えていると思われる。

また、小学校のある太田市では、市民憲章の一環として、郷土への理解を深めてもらう運動のためとして『太田かるた』が作成されている。このかるたの内、「よ」の札は「用水の歴史を伝える岡登」とさ  
れて、『岡登用水は笠懸野の荒野を潤すため代官「岡上次郎兵衛景能」  
によって寛文十二年（一六七二）に開削された水路です。大間々扇状  
地にあつて不毛の地と考えられた笠懸野に、渡良瀬川から用水を引き  
岡登用水を完成させ、本町宿（大原町）など二九か村、二〇〇〇石  
余りの新田を開発しました」（傍点筆者）との解説が付されている。<sup>38</sup>

このように誤った地域史像は、必ずしも指導する教諭に問題があるのではなく、一章でみたように、地域一般に形づくられてきたものが

あり、教育委員会等により提供される副読本や副教材に誤りはないとの認識のもと、一部研究者の指摘も周知されず来ってしまったことが大きいのである。

## おわりに

以上みてきたように、一次史料を中心とした史料にもとづく史実と、典拠が示されない二次史料を参考とする解説の内容とは大きな隔た  
りがある。

平成六年より始まり、現在もみどり市長らも参加し岡上景能公顕彰祭が、命日である二月三日に岩宿博物館駐車場銅像前で挙行されている。これは笠懸野を潤す岡登用水を完成させた郷土の偉人として遺徳を偲んでのものである。(傍点筆者)

地域史は、史料にもとづき客観的に史実を明らかにしていくことが重要である。

改めて史実として明確にしておかなくてはならないことは、次の六  
点である。

- ①笠懸野の開発は、岡上景能単独のものでなく、延宝五年代官高室政職の勇退までは立会支配（共同事業）であった。
- ②岡上景能らの開削した用水（笠懸野御用水）は、灌漑、特に水田を潤すためのものではなく、足尾銅山街道本町宿の宿用水としてのものである。

③笠懸野御用水と現在ある岡登用水は、大部は当時の水路とは別のものである。

④笠懸野の新田開発（＝開拓）は、水田を切り開くことではない。

⑤現在水田として開かれているところは、明治期以降の岡登用水によるものである。

⑥岡上景能は冤罪で自殺したのではなく、幕政における賞罰厳明策により幕領の会計監査が強化され、結果として大量に処断された代官衆の一人として、刑罰である切腹に処せられたものである。

右に示した点は、代官岡上景能が地域に実績を残した人物であることを否定するものではなく、正しい地域史を理解した上で、改めて景能について考えてもらいたい。そのためにも、一刻も早く県教委をはじめとする公共的な解説等については、史実による訂正を加えていただきたいと願うものである。

（にしざわ あつお・高崎経済大学地域政策学部准教授）

# 註

- (1) 拙稿「地域史」（増田正・友岡邦之・片岡美喜・金光寛之編『地域政策学事典』勁草書房、二〇一一年）。
- (2) 天草についての記述は、鶴田文史編著『天草鈴木代官の歴史的検証』（天草民報社、二〇〇六年）によるが、一部田口孝雄他編著『天草代官鈴木重成鈴木重辰関係史料集』（鈴木神社事務所、二〇〇三年）、田口孝雄『鈴木重成小伝』（鈴木神社事務所、二〇〇二年）他及び二〇一二年二月現地取材による。
- (3) wikipedia/鈴木重成 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E6%9C%A8%E9%87%8D%E6%88%90> (2012-04-04取得)
- (4) 『笠懸村誌』上巻（笠懸村、一九八五年）、『笠懸村誌』別巻三、近世史料集（笠懸村、一九八九年）、笠懸村誌基礎資料四号『笠懸野古用水（岡登用水）再興の努力』（笠懸村誌刊行委員会、一九八〇年）。
- (5) 『数塚本町誌』上巻（数塚本町誌刊行委員会、一九八二年）、数塚町誌基礎資料第一号『数塚本町古文書所在目録』（数塚本町誌刊行委員会、一九八四年）。
- (6) 萩原進・丑木幸男『代官岡上景能』（新人物往来社、一九七六年）。
- (7) 丑木幸男『岡登用水史』（岡登堀土地改良区、一九九二年）。
- (8) 浅田晃彦『考証岡上景能』（奈良書店、一九八三年）。
- (9) 第34回企画展『岡上景能とあかがね街道』（笠懸野岩宿文化資料館、二〇〇二年）、第36回企画展『岡登用水』（笠懸野岩宿文化資料館、二〇〇三年）。
- (10) 国井洋子『笠懸野を開発した足尾銅山代官 岡上景能』（『振興ぐんま』100号、群馬県教育振興会、二〇一〇年）。
- (11) 国井洋子『代官岡上景能と足尾銅山街道』（群馬県歴史教育者協議会『史料でみる群馬歴史』山川出版社、二〇〇七年）。
- (12) 鈴木一哉『笠懸野の開発と岡登用水開削』（江戸時代人づくり風土記⑩『ふるさとの人と知恵群馬』農山漁村文化協会、一九九七年）。
- (13) 日下部高明『長林寺溜池と岡上景能』（石井進監修『下野山川長林寺乃研究』新人物往来社、二〇〇六年）。
- (14) 平成五年十二月三日 岡登景能公顕彰保存会。
- (15) 平成六年十二月三日 岡上景能公銅像建立推進会議。
- (16) 墓・県指定史跡、昭和六十年八月 群馬県教育委員会・みどり市教育委員会。
- (17) 紙芝居『岡登用水ものがたり』（平成十三年度収穫感謝祭実行委員）群馬県土地改良事業団体連合会HP <http://www.kakasi.or.jp/> (2012-03-30取得)。
- (18) まんが『岡上景能公』（笠懸野町岡上景能公顕彰会、一九九三年）。
- (19) 企画・発行：笠懸町岡上景能公顕彰会、監修・協力：笠懸町教育委員会 平成十一年三月二十三日。
- (20) <http://www2.g-tak.gsned.jp/> (2012-04-30取得)。
- (21) 『厳有院殿御実紀』巻38（新訂増補『国史大系』第四二巻 徳川実紀 第五篇、吉川弘文館、一九三五年）。

- (22) 新訂『寛政重修諸家譜』第五(統群書類従完成会、一九八四年)二八三頁。  
 (23) 田村和万氏蔵(註4『笠懸村誌』上巻、口絵写真)。  
 (24) 註21に同じ。  
 (25) 片山英弥氏蔵(註5『藪塚本町誌』特別付図)。  
 (26) 『竹橋余筆』巻5(大田南畝編・村上直校訂『竹橋蠡簡・竹橋余筆』文献出版一九九五年)三二八頁。  
 (27) 『寛政重修諸家譜』第十五(統群書類従完成会、一九八四年)四七頁。  
 (28) 柳伴助氏蔵(註4『笠懸村誌』別巻三、史料九三)。  
 (29) 瀬戸勇氏蔵(註5『藪塚本町古文書所在目録』口絵写真史料)、他に同種のもの九点ある。  
 (30) 『常憲院殿御実紀』巻16(新訂増補『国史大系』第四二巻 徳川実紀 第五篇、吉川弘文館、一九三五年)。  
 (31) 津久井栄太郎氏蔵(註6『代官岡上景能』二二七頁掲載史料)。  
 (32) 註25に同じ。  
 (33) 岩崎全男氏蔵(註4『笠懸村誌』別巻三、史料五六)。  
 (34) 滝原経男氏蔵(註5『藪塚本町誌』特別付図)。  
 (35) 清水清弘氏蔵(註4『笠懸村誌』別巻三、史料九八)。  
 (36) 国文学研究資料館(註4『笠懸村誌』上巻、七一九頁掲載史料)。  
 (37) 国文学研究資料館(註4『笠懸野古用水(岡登用水) 再興の努力』[原文1])。  
 (38) 「辰六月笠懸野新田に寺院建立の書付寛控」(註4『笠懸村誌』別巻三、史料七五)。延宝四年時点で笠懸野新田内に三寺院建立の寺社奉行宛覚にも連署している。  
 (39) 註4『笠懸村誌』上巻、五三一～三三三頁掲載史料。  
 (40) 註6『代官岡上景能』「岡上次郎兵衛景能伝記資料」(一)。  
 (41) 註6『代官岡上景能』「岡上次郎兵衛景能伝記資料」(四)。  
 (42) 註6『代官岡上景能』「岡上次郎兵衛景能伝記資料」(三)。  
 (43) 『国史大辞典』(吉川弘文館)『JapanKnowledge+ (有料オンラインデータベース、<http://www.jkn21.com/top/corpsdisplay> (2012-03-18取得))。  
 (44) 註7『岡登用水史』一三三～一三四頁。  
 (45) 新訂『寛政重修諸家譜』第十七(統群書類従完成会、一九八一年)二四〇頁。  
 (46) 『断家譜』第一(統群書類従完成会、一九八一年)一七三頁。  
 (47)・(48) 註30に同じ。  
 (49) 『竹橋余筆』巻3(大田南畝編・村上直校訂『竹橋蠡簡・竹橋余筆』文献出版一九九五年)二四五頁。  
 (50) 深井雅海「綱吉政権の『賞罰厳明』策」(『徳川將軍政治権力の研究』吉川弘文館、一九九一年)、辻達也「天和の治について」(『史学雑誌』六九篇一一号、一九六〇年)。  
 (51) 註30に同じ。

- (52) 拙著『代官の日常生活』(講談社、二〇〇四年)六五頁。  
 (53) 『日本国語大辞典』(小学館)『JapanKnowledge+ (有料オンラインデータベース、<http://www.jkn21.com/top/corpsdisplay> (2012-03-18取得))。  
 (54) 和泉清司「近世前期 郷村高・領主データベース」(『近世前期郷村高と領主の基礎的研究』岩田書院、二〇〇八年)付録。  
 (55) 村上直「関東幕領における八王子代官」(『日本歴史』一六八、一九六二年。のちに改稿して論集『日本歴史7 幕藩体制』I、有精堂出版、一九七三年に収録)。  
 (56) 深井雅海・藤實久美子「江戸幕府 役職武鑑編年集成」(2)・(4)『(東洋書林、一九九六年)。  
 (57) 平形公宏「先人の働きや苦心を自分とのかかわりから考える力を育てる指導の工夫―地域マップに様々な情報を重ね合わせる活動を通して―」(群馬県総合教育センター、平成十七年度特別研修員研究報告書)『<http://www2.gsned.jp/houkoku/2005/kyouka/05006/index.html> (2012-05-03取得)。  
 (58) 『太田かるた』絵札・読み札一覧や行(太田市Hd) <http://www.city.ota.gunma.jp/005gyosei/0050-001shimin-soudan/yomifuda-ya.html#yo> (2012-05-03取得)。

## 〔付記〕

本稿は、平成一三年度高崎経済大学特別研究助成金による研究成果の一部である。